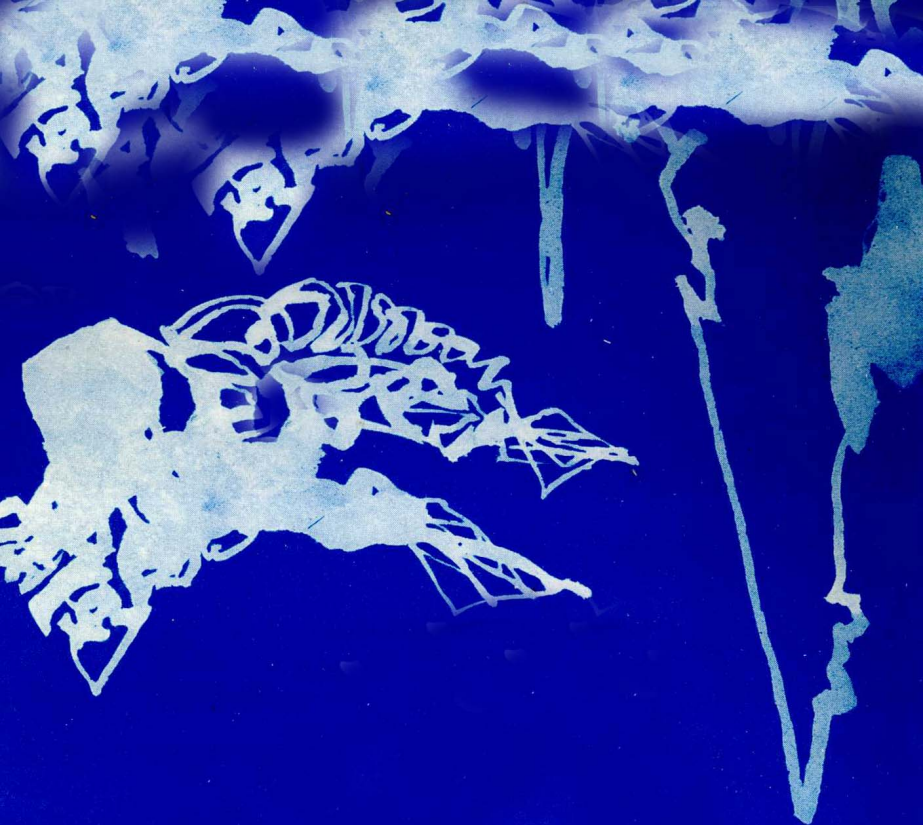


密獵者万次郎

戸川幸夫



密獵者万次郎

戸川幸夫

毎日新聞社

密獵者万次郎

定價 四九〇円

昭和四十六年四月十日 印刷
昭和四十六年四月二十日 発行

著者 戸川幸夫

編集人 星野慶栄

発行人 朝居正彦

発行所 毎日新聞社

T 100 東京都千代田区一ツ橋

T 530 大阪市北区堂島上

T 802 北九州市小倉区紺屋町

T 450 名古屋市中村区堀内町

印刷・凸版印刷
製本・大口製本

検印省略

密獵者万次郎

装
幀

横
塚
繁

奥羽地方を縦走する那須火山脈は、青森県の下北半島に入って恐山を形成し、津軽海峡に一旦もぐって再び頭をもたげ、北海道の胆振、後志の火山群に結びつこうとする。その途中に横たわっているのが渡島半島であった。半島は旧火山の横津岳、袴腰岳などが軀幹となり、それを挟むようにして両端に恵山、駒ヶ岳の新火山がそびえている。

これらの山脈を背景とした渡島半島の南東突出部はすばらしく景色がよく、亀田半島または恵山半島の名で呼ばれていた。

鹿部村はその活火山駒ヶ岳の南東山麓にあたる漁村で、近くの農漁村の老人たちを集める程度の力しかなかったが、とにかく温泉なども噴き出していて、この沿岸一帯ではまあましな方であった。

渡島万次郎は、一八八八年というから明治二十一年の春、まだ雪のある頃に、この鹿部から三里ほど距った一寒村で

生れた。

彼の生れた集落は、戸数にして十二、三戸もあったろうか。どれも同じ程度の貧しい漁民の家が、海ぞいにばらばらと建っていた。集落のすぐ前は海で、うしろには横津岳の傾斜面がゆるやかにひろがっていたが、その土地を拓こうとする者もなく、寒地性の原生林が暗く斜面を覆っている。

火山灰に覆われたごろごろ石の、それでいて雨がくるとすぐ田圃のようになる道が、斜面の下をくねくねとうねって、その道と平行した海岸線との間の狭い地帯に集落はあった。海は内浦湾と呼ばれ、万次郎が生れるころにはもう鰯や鯨漁はすっかり傾いていた。

内浦湾は、むしろ噴火湾という呼び名の方が知られていた。一七九六年（寛政八年）に英国の捕鯨船プロビデンス号が鯨を追ってこの湾に入ってきた。

そのころは、アイヌが丸木舟を浮べて原始的な漁りをするくらいのものであったから、直径が五十キロに及ぶこの湾には魚族や蝦類が多く、それを追って入り込んでくる鯨類も多かった。

プロビデンス号の船長ブローテンは、ここに投錨して、暮れなずむ空に煙を吐いて聳つ駒ヶ岳や有珠岳を眺め、雄

大な景観に讃辞を惜しまなかった。

「すばらしい。なんと雄大なことだ。この湾のことを私は Volcano Bay と名づけよう」

彼は英国に帰ってから、その名を地理学協会に届けた。

これが噴火湾の名の起りだと伝えられている。

たしかに魚貝類は無尽蔵を誇つてよいほどに豊富であった。脱走旧幕臣として榎本武揚の軍に投じ、明治二年の降伏のあと切りほどこきになって、北海道定住を志し、この地に落ちついた万次郎の父大西紋十郎が紋十と名を変えて漁師になったころは、鯨の群が殺到して海草や流木に卵をうみつけ、それが時化に遭うと岸に叩き上げられたのが四、五尺も積つて、腐り、臭くてたまらなかった。舟に乗つて下を見ると集つた鯨で海が黒く底の石が見えなんだ、という夢のような話も、事実あった。集落の裏山や、街道すじの集落ごとに鯨の供養塔が見られることで、決して嘘や大げさな話でないことはわかった。

それが、この二十年ほどで、ひどい変りようだった。濫獲が魚田を荒らしたことは事実としても、魚族が絶えるほどに漁法が進歩したわけでもなかったが、潮の流れに変化が起つたのか、ぱったりと魚は来なくなった。

いや、魚が来なくなったのは湾内であつて沖合はるかに

魚群が回遊していることは、そこに群る鰯や海豹や鰐鰯が多いのでわかった。しかし、この辺りの人々の舟と漁法では、それを追うのは無理であつた。手に届かない獲物なら、無いのに等しい。

それにしても、魚群が湾内に入つてこないというのは理由がなければならなかった。湾の海底に、何か不気味な変化が起りつつあつたに違いない。だが、集落の男たちは、そんな原因を詮索する前に、よその景気のいい漁場に出稼ぎに出てしまった。紋十もその一人だった。

万次郎が生れ落ちて間もなく駒ヶ岳の大爆発が起つた。

既に数日前から気味の悪い鳴動が続き、噴煙の量も多くなつていた。寛永、明和、天明、安政とたびたび起つた大爆発で家を焼かれ、津浪や地震で数多くの犠牲者を出した悲惨な歴史を持つアイヌたちは、こんどもきっと大爆発があるに違いないと予言していた。鹿部の方では避難した人もあるとの噂だった。だが、万次郎の集落では誰も家を離れようとしなかった。避難しようにも行くあても、金もなかった。ここを離れては明日からの生活がないのだ。

人々は不安気に山を眺めては、山が怒らないことを願うだけだった。

「母ちゃん、山が火イ噴いたらどうするだ？」

万次郎の兄の七歳になる千太郎が母親の仲にたずねると、仲は、

「仕方ねえベサ……。そんなやあ、舟で海サ逃げるだ」

その用意は、どこの家でもした。軒は傾いていても、海で生活しているだけに小舟のない家はなかった。集落の者は持ち舟にわずかばかりの布団だの食糧だの、衣類のをせていつでも漕ぎ出せるように準備していた。

鳴動は未明から激しくなり、水蒸気が気味わるく空を覆った。強まったり、弱まったり、遠のいたり、近づいたり、陣痛にも似た地鳴りは刻々と激しくなり、昼ちかくになって大爆発をした。電光が閃き、雷鳴が轟いた。巨大なきのこ形の噴煙は、みるみる空いっぱいに拡がり、間もなく焼石が灰とともに音をたてて落ちはじめた。

「逃げるだあ、海サ逃げるだあ……」

人々の叫び声が渚へとかけおりていった。恐怖に泣き叫ぶ子供たち、それを叱りつけながら走る親たちの声が、激しくなってきた落石の響きの間に、とぎれとぎれに飛ぶ。親は子を抱き、若きは老いたるを背負って逃げまどった。「お仲さあ、早く逃げるだあ……。でねえと火の河が流れてくるだよ」

裏の家の、お末がせき立てて駆け去った。

「あい、あい……。いま、行くだ」

仲は万次郎をくるんで抱いた。

「千太郎、婆ちゃんの手を引っぱって逃げれ」

彼女は怒鳴った。そのとき家鳴り震動してつけもの石ほどの焼石が、屋根をぶち抜いて流し場に転げこんだ。

「どしたらいいべか……」

老婆のとは、敷居口にべったり坐りこんで泣きはじめた。

「駄目だ、婆ちゃ。走らねばだめだ」

仲は叱りつけるように、

「千太郎、何でもええ。頭サかぶれッ、石おちてくっからな。婆ちゃんサも、何か、かぶせてやれ」

浜辺までの距離はいくらもなかったが、それがひどく遠いところのように感じられた。落石は、彼女らの周囲に、ぼんぼんと跳ね、降灰は、ぎーっ、ぎーっと夕立のような音をたてて降り注いでいた。

仲たちが、やっと浜辺にたどりついたときは、大方の舟はもう海に漕ぎ出していた。仲は、とよと千太郎を舟に乗せ、万次郎をとよにあずけると、布団をかぶせた。

とよは万次郎を抱いて、布団の下で小さく丸まって、ふるえ声の念仏を唱えていた。仲は海に入って舟を押した。

だが、女一人の力では砂に喰いこんだ舟はびくともしなかった。そのとき突然に仲はよろめいた。大地が吸いこまれるように激しく揺れ、海水が奇妙な三角波を立ててジャボジャボと騒いでいた。それが爆発にともなう大地震であったことに気づくまでに、彼女はちょっと時間を要した。

ただ、そのために、波にもち上げられて舟が海にすべりこんだ。小さな津浪が起つて、沖に出ていた舟の二艘が転覆し、そこにも悲鳴が起つていた。

沖に出て、仲ははじめて風が山の方から吹いており、そのために噴煙が噴火灣を覆い、灰と石とが鹿部方面にしきりと落下しているのに気づいた。

その一日だけで爆発は、十数回あった。時がたつにつれて噴火はますます激しくなり、硫黄の臭いが海一面に立ちこめた。

集落は、猛烈な砲撃をうけている陣地のように、ひっきりなしに白煙をあげていた。それは落石が家にあたり、屋根に積った降灰を舞わせているのであった。やがて白煙に混って、黒煙があがりはじめた。火が出たのだ。

「ああ、おらん家が焼けるなあ……」

舟の間から悲痛な叫びが上った。泣き声がすぐ後につづいた。

吹きとばされた火山弾は、この辺にもしきりと落下して大きく水柱を立てた。それでも集落の人々は、自分の集落に執着して、惨状の見えるところから離れようとしなない。「いけないッ、みんな。ここさいたら石に打たれて、死にまう。もつと沖まで行くべ」

気丈な仲は叫んだ。彼女は必死になって漕いだ。

日が暮れてきた。日没と共に噴煙は巨大な火柱と変じ、電光と雷鳴とが間断なくその下を這っていた。山全体が煙の中に在って、どんな形に変わったのか見る術もなかった。

沖に出るにつれて視野はひらけ、沿岸の村々の惨害が見わたせた。鹿部に近い集落も炎々と燃え上っていた。

山の斜面はまっ赤な溶岩の流れが走り下って谷を埋め、それが火竜ののたうつような形でさらに麓へと押し出して森林を焼き、裾野をただれさせていた。

海は——いつもならまっ暗の中に夜光虫の光る海も、この夜はまっ赤に輝いていた。

人々は茫然として、大自然の暴威を空ろな眼でながめていた。もう怖れも、悲しみも忘れていた。呼吸しているだけで、死んでしまったような人々であった。

そのとき、

「オッコーン……」

と万次郎が呼んだ。仲は、はっと自分に還った。

「ああ……」

仲は急いで、胸をひろげて万次郎を抱いた。みんなが呼吸するのも忘れてしまったほどの恐ろしい夜を、この子だけは平気な顔で迎えている。

万次郎は、きつと立派な男になってくれるかもしれないよ。

彼女は自分にいきかせた。

三日目、どうやら噴火も下火になって、みんなが集落に戻ってみると、そこはまるで別世界のように変っていた。

浜も、道も、野も降灰で一メートルほども高くもり上っていた。その中に、ごろごろと転っている落石はまだ焼けて熱く、山は硫氣に包まれていた。

記録によると、『この時、東南即ち鹿部方面に降った浮石は一メートルの厚さに達し、一切のものを覆い、屋根を打ちぬき、河を埋め、その一部は遠く東方海上を浮流して、後に函館、室蘭地方から遠くは岩手県沖に達した』とある。仲の家も、他の集落の者たちの家同様にめっちゃめちゃに毀され、わずかばかりの畑も降灰の下で窒息してしまっていた。

仲は、紋十とはこの土地で一緒になった。紋十が武士の

出であったのにくらべて、彼女は東北から移住してきた漁民の子孫で、無学ではあったが、利口で、氣丈で、男まさりであったから、こんな事態に遭っても泣き言は一言もいかなかった。

下火になったとはいえ、山は依然として轟々と唸り、噴煙を吐きつづけ、地震はひっきりなしに襲ってきて、またいつ爆発するかわからない状態だったので、集落の者は再び海に出た。

だが、仲は残った。

「これだけひどく怒ったんだもの、もうだんだんに鎮まるベサ。人間だって、山だって、そういつまでも怒ってなんかいらんねえもんだ」

仲は他人より一日でもはやく、元の生活に戻ろうと決心した。彼女は家の修理にかかり、殆ど独りだけの力で、どうやら住めるようにした。

そのころ、変を聞いて、紋十が戻ってきた。紋十は根室の漁場に出稼ぎに行っていたのだが、戻ってきて集落の惨状をひと目みただけで、もう駄目だ、と思った。これではちょっとやそつとは立ち直れそうもない。

もともと彼がこの土地に流れてきたのは、ここが五稜郭に近くて、噴火湾に魚が多いということを耳にしていたか

らであつた。来てみれば切りほどきの幕臣に対する人々の同情が温かつた。

彼がここに居つたのは、この土地に愛着があつたからではなく、居心地がよいからであつた。つまり新しい人生の門出をするのに適当な土地であつたからだ。

紋十となつた紋十郎を、どうやら一人前の漁師らしく仕込んだのは親方の渡島庄兵衛で、そういつたことから紋十郎は庄兵衛の一人娘、仲の智となつた。

だから仲と紋十との、この土地に対する考え方が根本から相違しているのは無理もなかつた。

鯨や鰯が無尽蔵にとれていた時代は、この集落もよかつたが、潮が變つたのか突然に一尾の鯨も網にかからなくなつて、烏賊や昆布にたよらなければならなくなると、噴火湾内の各漁村はみるみるさびれていった。

根室の景氣のよさをいやというほど見せつけられてきた紋十には、海沿いにありながら海の幸もなく、耕そうにも火山灰に厚く蔽われているこの土地が、永遠に望みのないもののように思われるのだった。

「なあ、仲。もうこの土地は駄目だと思ふのだがな。噴火や地震が多い。ここに比べると根室はよい。どうだろうな、いっそのこと引越しては……」

紋十は破れた屋根を見上げて、仲に相談した。

「それであんた、根室に行つて漁場でもひらけんですか？」

「さ、それはすぐというわけにはいかんだろう。親方になるには船も要れば、網も要る。人を集めるにしたつて、金がかかる」

「根室は、ここよりもずっと寒いとこで冬の間は海に氷が張つて漁もでけんと聞きましたがの」

「それはまことじゃ。だが、根室はひらけてゆく土地だからな。漁場が駄目なら牧夫にでも、材木伐りでもほかの商売でも働きの口はいくらもあるのだ」

「あなた、なにお言ひなさる。ここはわたしの曾祖父さま、祖父さまが苦労して拓かれた土地です。」

なるほど、今は鯨や鰯も下火にはなっていますがのオ、これは潮が變つたからじゃ。根室でも同じことが言えましよう。

あなたは江戸から來られた方ですけおわかりにならんかも知りませんが、ここに住む人たちの先祖もみんな噴火や地震や、津浪に遭うてきとられます。

だがそれに耐え抜いて生きてきなさつたのです。魚だつてとれるときばかりではなかつたベサ。いまに魚は戻ってきますべ。

ここにいれば、小さくともあなたは漁場の親方です。渡島の家といえは鹿部では知られた親方の家ですけの。その親方が、よその土地に行つて、奥州あたりからの出稼ぎの百姓と一緒にゐて網をひいてどうするといふのです。

魚が獲れないときだから、働きにゆくのもいいでしょう。でも、それは手助に行つてやるんです。先祖代々の土地を捨てて、人に使われて、申訳たつもんだか、よく考えて下さい。

わたしは嫌です。婆ちゃんも嫌でしょう。出稼ぎは一時のこととして、ここへ必ず戻つてきて下さい。

魚は必ず戻つてくる。たとえ鰯や鰯が戻つてこんでも、ほかの魚がくるようになるかもしれないし、またほかの魚が町に売り出せるようになるかもしれない。

わたしは構いません。昆布をとったり、畑を耕したりして何とかやつてゆくから、あんたは弱気を起さんで働いて下さい」

仲は涙を浮べて夫を励ました。

渡島万次郎はこういつた気丈な母の性質をうけついでいた。負けん気で、ねばり強く、なにかを始めたら満足のゆくまではやめない、その萌芽は幼いときから見えはじめて

いた。

兄弟喧嘩をすると、七つ年上の兄千太郎には腕力では叶わなかった。それを万次郎は気力で補つた。殴られても、つき転ばされても、万次郎はあたりまえの子供のように泣き声を出さずに、なんどもむしゃぶりついていった。大きな眼玉をぎらぎらと光らせてどこまでも突っかかってくる万次郎を見ているうちに、千太郎の心に恐怖が湧いてくる。そこで彼は、このしつこい弟と、どの辺で和解の手を打とうかと考えはじめ、結局、最後の一撃を万次郎に譲ることで、喧嘩を止めに行ふように思うようになる。善良で、小心者で、どこか紋十ゆずりの人の好きがあつた。

「万十、そんなら叩け、一つだけ叩け」

最後に千太郎は、そういつて万次郎の前に頭を突き出す。万次郎はそれを待つていて、下駄を脱いで、両手に持つて拝み打ちに思いつきり殴る。あるときは裸足だったので、石で殴つて千太郎の後頭部にひどい怪我をさせたことがある。その傷の痕は禿となつて千太郎の頭に永遠に残つた。

千太郎はあるとき万次郎をからかつて逃げたことがある。万次郎は下駄を持つて追っかけてきた。駆ければやはり千太郎のものであつた。だから最初のうち彼は万次郎をからかいながら逃げた。万次郎は飽きずに追つてきた。

彼の集落から鹿部まで、三里の道を逃げて千太郎は空腹と疲れで眼がまわりそうになった。この日は、すっかり暗くなってから兄弟は戻ってきた。仲が心配して提灯を用意して捜しにゆこうとしているときだった。千太郎はおでこに大きな瘤をつくっていた。

子供仲間の喧嘩で、兄の千太郎は泣かされて戻ってくる。ことがしばしばだったが、万次郎にはそれがなかった。

それどころか、彼は兄の仇を討った。負けても、相手が油断するまで万次郎は根気よく待った。一週間もたつてから、いきなりうしろから棒で叩かれて、殴られた側では、なぜだか急に思い出せなくてぼかんとしている時もあった。

「渡島ンとこの千太はいいが、万チにはかまうな」

と、子供たちは言うようになった。

父の紋十が水晶島の沖で、突風を喰って舟が転覆し、戻ってこなかったのは万次郎が十歳、千太郎が十七歳の鳥賊漁のときであった。

それまでは、紋十からの仕送りもあって、どうやら暮してゆけたが、紋十が死んでからは、生活の重圧は仲の肩にのしかかってきた。幸に千太郎は、一人前の若者になっていたので、横津岳の雑木林の払い下げをうけて薪づくりをやり、万次郎は母に手伝って昆布をとった。

その翌年、とよが死んだ。言ってわるいことだが、仲は一人でも口が減ったことを助かったと思った。

三人で働けば、どうやら暮してゆけた。千太郎は、その日その日が安穩無事に暮してゆければ満足で、

「そのうち嫁もろてな、母ちゃんを楽させるんじや」

と言っていた。だが、万次郎は違っていて、

「俺あ、偉い奴になるどお……」

「ふーん、万チ、偉い奴でどんな人になるんか？ 村長さ

んかい？ それとも親方かい？」

大人たちが、からかうと、

「もつと偉い奴じや、日本一になるんじや」

と胸を張った。

「ほーう、そりやあ立派じや。じゃが、なんの日本一になるんじや？」

万次郎には、まだ何の日本一になるのか、わからなかった。

「何でもええ。日本一になるんじや。わるいか……」

と唾を吐いた。

集落は——この集落だけに限らず鹿部でも——周辺を原始林にとりかこまれていたので鳥獣が多い。

熊が闇にまぎれてのっそりと家の戸口に爪あとを残すこともあれば、蝦夷鹿が犬に追われてまっ昼間、集落を風のように通り抜けることもしばしばだった。

だから漁師たちの中にも——というよりは多くが——無届けの鉄砲を持っていて山獵もした。みんな密獵である。

万次郎の家にも、紋十が使った古ばけた鉄砲があった。

手入れがよくないので、錆がきいていたが、撃つことはできた。千太郎も、集落の連中と共にこの古銃を肩に山にゆくことはあったが、せいぜい蝦夷野兎だの雷鳥だのを獲ってくるぐらいで、腕は貧しく、また好きでもなかった。

千太郎にくらべると万次郎は、鉄砲に幼いときから興味をもっていて、いじりたがった。仲が心配して、神棚の、手の届かないところにほうり上げたのもその故だった。

万次郎は千太郎に、

「俺サも扱わせろ」

と、せがんだ。

「子供は危ねえ」

千太郎は、仲に言われているので貸さなかった。万次郎はそこで黙ったが、もちろん諦めたわけではなく、例の執拗で、隙を狙っていた。

ある冬のこと、千太郎は兎撃ちから戻って鉄砲をしまい

忘れた。万次郎は兄と母の眼を盗んで鉄砲と弾帯を持ち出した。

今日こそやってみせるぞ……万次郎はほくほくしていた。

「万次、鉄砲持ち出して何するんだ？」

声をかけたのは、裏のお末の倅の庄作である。お末は「半後家」の名で呼ばれていた。半後家という意味は、後家ではない。亭主はいるが、その亭主が出稼ぎに出て、ずっと家を空けていたからだ。半後家にはただそれだけでなく、もう少し別の意味があった。

お末は、ときどき日炎けた顔に白粉などを塗って鹿部に呼ばれてゆく。漁師のおっ嬢の日炎けた体を抱いてみたいという物好きな客が呼ぶという噂だが、とにかく何がしかの金を得て帰ってくる。それは彼女の毎月の生計の予算の中に、ちゃんとくり入れられていた。半後家も同じ渡島姓だった。親戚というのではないが、この辺りは渡島姓が多かった。ずっと以前は、いずれ同じ祖先から分れた者たちなのか、それとも明治となって庶民に姓がゆるされて、一様に渡島とつけたものか、もちろん万次郎にはわからない。庄作は万次郎より三つ下だから、この時は九ツ。まっ黒い顔に二本棒を鼻の下で光らせていた。

「鉄砲で舟こぐ奴もあるめえ。撃つにきまっとる」

「万次郎は、小生意気な理屈を言った。」

「ふーん、何撃つんだ？」

「そんなこと……俺にもわかるかい。出たところ勝負だベサ」

「面白そうだな、俺もつれてッちくれ」

「おお、来たかったら来いや」

万次郎は兄貴ぶった。山畑に出ると、枯木に鴉がとまっていた。万次郎はまずそれを撃とうと思つて崖を上った。

どう狙つたら中るかも知らなかったが、とにかく見よう見まねで狙い、曳き金をひいた。

びっくりするような音と共に、万次郎は銃尻でがつんと肩をはじかれ、うしろにひっくり返り、そのまま雪道を二間も下までずり落ちた。銃尻をびったり肩につけねばならないなんてことは彼は知らなかった。

「万チ、だいじょぶか」

庄作が心配そうにのぞきこんだとき、万次郎は羞しきで、ぶりぶりして、

「なんでもねえ」

痛む肩を押えもならず起き上った。それから、いきなり庄作の顔をばかりと殴ると鉄砲を片手にどんとんと駆け出していった。

母には黙っていたが、肩はその後なん日も痛んだ。庄作

から話を聞いた集落の老人が、くつくつと笑いながら、

「万チ、鉄砲ちゅうもんはな、肩から放しちゃうたらんぞえ」

と教えると、万次郎は、

「知つとるともさ。だから落ちて俺、鉄砲にぎってたベサ」

負けず嫌いの憎まれ口を叩くのだった。

二

秋がきて、雄大な広がりを見せている横津岳は、そのゆるやかな傾斜の中に黄や紅の輝きをにじませはじめていた。兄の千太郎がこの山の山巒三嶺の山林を払い下げてもらったとき、万次郎は十三歳になっていた。体はさして大きいというほどではないが、山の予らしい、がっしりとした、元氣いっぱい少年であった。

こんど手に入れた山は、それまでの裾山とは違ってずっと奥の方で沢がふかく、樹木も大きかった。

樹を伐り倒して、それをひき割り、薪として町にもって行って売るのが千太郎の仕事だったが、千太郎はすぐに音をあげた。

「こんだのところは山が遠いしよ、小屋がけしてやらねばならねえから万チをつれてっていいべ？」

千太郎は母親の仲に遠慮しいい言った。仲の手伝いとして海草をとったり、貝を拾ったりしている万次郎をつれ

出せば、仲の労働は過重になることはわかりきっている。だから反対されるかも知れないという心配もあったので、「万チも、山サ行ってみてえ、とかねがね言ってたし……」

半分は弟のせいにかこつた。

「ああ、連れてくとい。ここは俺ひとりで沢山だから……」

思ったより簡単に仲が承知してくれたので、千太郎はほつとしてこんどは万次郎に誘いをかけた。すぐに行くと言うと思ったが案に相違して万次郎は渋った。

「母ちゃんをどうすんだ。たった一人で残されッかよ」

「だけだよ、母ちゃんはいいと言ってるだから……何と言つたって山の木ィ町サ出さねば金にならねえもな。

俺ひとりじゃ曳き出せねえ木も多いだから……。他人を雇えば手間賃出さねばならねべサ」

「木は雪がきてから出すんだべ。伐り倒すときは一人でいいんでないか」

「よっぽど大きい木なら雪を待たねばなんないが、そうしてはいらんねえもな。

万チ、嫌なのか」

「仕事が嫌というわけではないども……」

「母ちゃんのことだバ心配ねえ。それに今ごろだと山にゃあ鳥、獣がいっぱい出てるから鉄砲いくらでも撃てるぞ。お前サ、あの鉄砲やるから持っていったらいいんでないか……」

年の功で、千太郎は万次郎の泣きどころを押えた。こう上手にもちかけられては万次郎の心も動いた。

二人は山に入ると、谷川の近くに丸太小屋を作って生活を始めた。山林に入るのを商売として選びながら千太郎は、むしろ町へ出ることに慣れていて、薪を売りに出る仕事となると自分がひきうけ、まる一日をそれにかけ遅くかえってきた。

「いやあ、この節は薪もなかなか売れなくてよ」

そんなふうな弁解をしながら万次郎に御機嫌とりの餅などを土産に持つてくることもある。

万次郎は千太郎と反対に、山が好きであった。この荒っぽい自然の中に入りこんでいると、何か勇氣が湧いてくるのだ。

町へ出ようなどという氣は彼にはさらになかった。千太郎が薪を借り馬の背につんで町に出かけていったあとは、彼は彼なりに自分の時間を愉しんだ。

溪流に魚を釣ったり、藪の中に毘をしかけたり、山林に

錆ついた例の鉄砲を轟かせたりするのだ。

北海道の秋ははやい。

丸太小屋の傍の落葉松が自慢氣に輝かしていた金色の葉をばらばらと風に散らせるようになると、もう間もなくながい冬がやってくる。

山の動物たちはそれを知っていて、それぞれ冬支度にかかっていた。縞栗鼠は木の実だけでは十分でないのか、万次郎たちの留守を見はからつては丸太小屋に忍びこんで米櫃から稗や麦を盗んだ。

「万チ、またお前、米櫃の蓋あけっ放しにしたベサ。見れ、ごっそりいかれてるから……」

千太郎はよくばやく。この小動物はそこに食糧があると知ると根氣よく、その食糧がなくなるまで通いつめる。一つがいで交替、交替でやってきては頬袋にいっぱいおぼつて巢にもどり、吐き出してはすぐにまたやってくるのだ。牡が忍び込んでいるときは牝が見張り、牝がほおぼっているときは牡が歩哨に立って、決して夫婦ともに夢中になることがない。そんな習性を、万次郎は面白いなあと思った。だから千太郎の眼を盗んでは稗や麦を一にぎり持ち出して岩の上に乗せる。持ち出しの犯人はむしろ万次郎といえた。